

## 「旧約の信仰者たちの手本」 預言者イザヤとヒゼキヤ王 (11:35~39)

女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。

またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるために会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、  
—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした— 荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

(11:35~39)

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と 11 章の内容

- (1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の中でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

## 2. 前回までの流れ

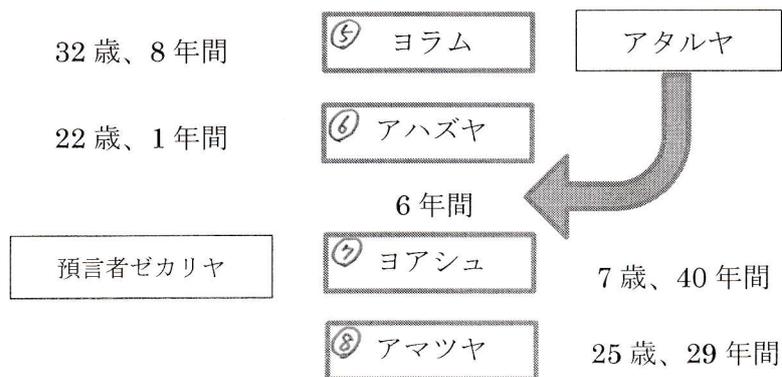
- (1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。
  - ① 二人とも信仰によって「剣の刃をのがれ」た) (ヘブル 11:34)。
  - ② 35 節「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました」とあるのは、エリヤ (I 列 17:17~24) とエリシャ (II 列 4:18~37) による事例
  - ③ 37 節「羊ややぎの皮を着て歩き回り」とあるのは、エリヤ (II 列 1:8)
- (2) 本日は、南王国の歴史の 4 回目
- (3) 南王国の第 1 回は、分裂後の 4 人の王を取り上げた。BC930~846

	① レハブアム	41 歳、17 年間
	② アビヤム	3 年間
最後の 2 年間は病気	③ アサ	41 年間
治世は 37 歳から 23 年	④ ヨシャパテ	35 歳、25 年間

その中から、特に三番目のアサと四番目のヨシャパテに焦点をあてた。

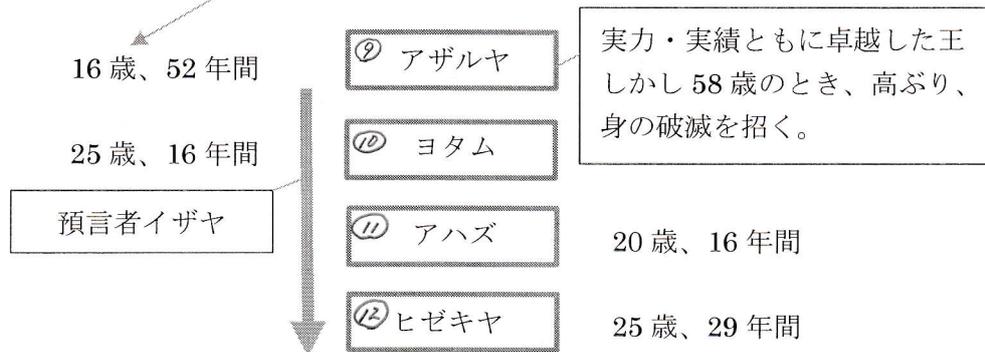
- ① アサ王は、「アサの心は一生涯、主と全く同じになっていた」(I 列 15:14)

- アサは、信仰を通して神の恵みにより霊的救いを受けた信者である。
  - しかし、晩年、彼を戒めた預言者を足かせにかけ、民のうちのある者を踏みにじった。その3年後、彼は両足とも病気になり、その病は重かった。
  - ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者をも求めた。発病から2年後に、彼は死んだ。
  - 信者が神の警告を無視して罪を犯し続けると、霊的救いは失わないが、肉体的裁きを受けることがある（ヘブル 10:26~27、I コリ 5:5）
- ② ヨシャパテ王は、信仰によって「他国の陣営を陥れた」（ヘブル 11:34）。
- ③ しかし、この戦いが起きた原因は、ヨシャパテが誤った方向に行ったことに對する、主の警告であった。誤った方向とは、北王国イスラエルのアハブ王の娘アタルヤを、長男ヨラムの嫁に迎え入れたことである。
- その娘の母親、すなわちアハブの妻は、かのイゼベルである。
  - 娘アタルヤは、バアル崇拜とともに母親の気質もしっかりと受け継いでいたようである。
- ④ 長男ヨラム以降の4代、南王国ユダは暗黒と混乱の時期を迎えることになる。
- (4) 南王国の第2回は、ヨラム以降の4人の王を取り上げた。分裂後では5番目から8番目の王となる。 BC848~767



- ① ヨラムは、主を捨て偶像崇拜に走るとともに、兄弟を皆殺しにした。
- その後、外敵の襲撃を受けて、残った息子はアハズヤだけとなった。
  - 彼自身は内臓の重い病気になって死んだ。
- ② アハズヤは、王となったその年、北で起きた謀反に巻き込まれて死んだ。
- ③ 王母アタルヤは、北の実家が滅亡し、それに巻き込まれて息子アハズヤが死んだと知ると、ただちに、アハズヤの子たちを皆殺しにした。そのとき、赤子ひとりだけ助け出され、6年間神殿にかくまわれた。その子はヨアシユ。
- ④ ヨアシユが7歳のとき、祭司エホヤダが親衛隊とともに立ち、王を自称していたアタルヤを倒して、王権を再びダビデの血筋であるヨアシユに戻した。
- ⑤ ヨアシユは、祭司エホヤダが死んだあと、民のつかさたちの要求を受け入れて偶像崇拜を認めてしまった。主は何人も預言者を遣わして戒めたが、王も民も聞く耳を持たなかった。

- ⑥ 祭司エホヤダの子ゼカリヤが預言者として立って主のことばを語った。民は陰謀により王の命令を引き出し、ゼカリヤを神殿の庭で石打ちにして殺した。37節で「石で打たれ」と言われているのは、このゼカリヤである。
  - ⑦ イエスも、このゼカリヤの死について言及した。マタイ 23:35「義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血」・・・ゼカリヤのあとも預言者の死は続く。イザヤやエレミヤも。イエスがここで、「アベルからゼカリヤまで」というのは、ヘブル語の旧約聖書の順序による。アベルは最初の巻・創世記、ゼカリヤは最後の巻・諸書の歴代誌に記録されていた。よって、イエスの言及は、旧約聖書が記録するすべての預言者たちの犠牲を指している。
  - ⑧ ゼカリヤが殺されたあと、アラムの少人数の軍勢によって南王国ユダは襲撃されて敗れ、ヨアシュはその責任を問われて裁判にかけられた。そのとき、すでにヨアシュは病床にあった。彼は病床で家来により殺された。
  - ⑨ 8番目のアマツヤは25歳で王となった。エドムとの戦いで1度勝ったことにおごり、29歳のとき、北のイスラエル王国に戦いを挑むも敗れ、捕虜になってしまった。このとき、その子アザルヤ16歳が代理王となるが、北イスラエルはアマツヤを王位に戻した。それから25年後、エルサレムの人々が謀反を起こし、逃げるアマツヤ54歳を追走、ラキシユで彼を殺した。
- (5) 前回と今回とで、アザルヤ以降の4人の王を取り上げる。分裂後では9番目から12番目の王となる。 BC792~686



- (6) この4人の王の時代に活動した預言者が、イザヤである (イザヤ 1:1)。
  - ① 預言者としての召命は、「ウジヤ王が死んだ年」(イザヤ 6:1)、よって紀元前740年。4人目の王ヒゼキヤが死んだのは紀元前686年。
  - ② よって、イザヤの活動期間は 54年 まさに、忍耐の年月である。
  - ③ 伝承では、イザヤは12番目の王ヒゼキヤの次、13番目の王マナセによって「のこぎりで引かれ」(37節)た。イザヤがマナセ王のときに活動したとは記されていないので、イザヤの死は、ヒゼキヤ王が亡くなってすぐ、紀元前686年頃であると推定される。
- (7) 前回は、アザルヤ、ヨタム、アハズの3人の王を扱った。本日は、ヒゼキヤである。

□ヒゼキヤ (25 歳、29 年間) BC729~715~714 (25 歳)~701 (第 14 年) ~686 (53 歳)

1. 略歴をⅡ列 18:1~8 に見る

- (1) 1 節「イスラエルの王ホセアの第 3 年」、これは紀元前 729 年。父アハズはこのとき、まだ健在で 22 歳。ヒゼキヤ 10 歳は父アハズとともに共同王となった。
- (2) 通常なら、父アハズが死んだ紀元前 715 年に単独王となり、そこからヒゼキヤの治世がカウントされる。しかし、彼の第 14 年に起きるアッシリヤの侵攻は紀元前 701 年である。よって、彼の治世開始は紀元前 714 年、1~2 年間のブランク
- (3) 2 節「25 歳で王となり、29 年間、王であった」・・・Ⅱ列 20:6 によると、ヒゼキヤの死は、治世第 14 年 (紀元前 701 年) から 15 年後、紀元前 686 年である。
- (4) 3 節 彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった。
  - ① 4 節 彼は高き所を取り除いた。石の柱を打ちこわした。アシェラ像を切り倒した。
  - ② 4 節 モーセの作った青銅の蛇を打ち砕いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた。

● 民 21:4~9

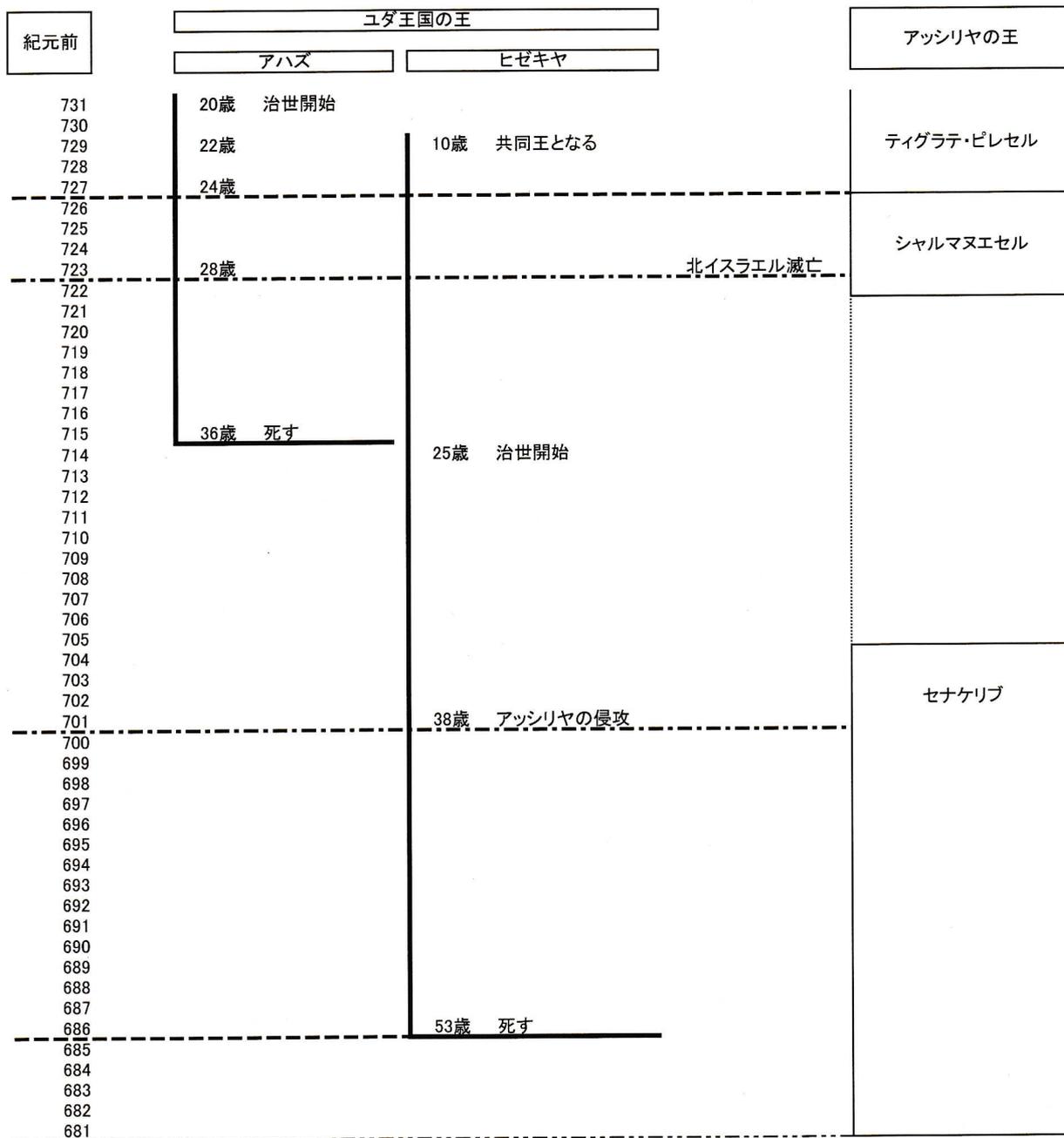
- ③ 5 節 彼はイスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった。
  - ④ 6 節 彼は主に堅くすがって離れることがなかった。
  - ⑤ 7 節 主は彼とともにおられた。
2. 紀元前 723 年に起きた大きな出来事・・・Ⅱ列 18:9~12、北のイスラエルがアッシリヤにより滅んだ。
- (1) 10 節 「ヒゼキヤの第 6 年、イスラエルの王ホセアの第 9 年」、共同王となった年 (BC729) から第 6 年、紀元前 723 年である。
  - (2) 紀元前 723 年は、父王アハズの 16 年間の治世では第 9 年、まだアハズ 28 歳である。まさにイザヤの預言のとおり、アラムに続いて北のイスラエルが滅んだ。
  - (3) アッシリヤ王シャルマヌエセルによりサマリヤが陥落した。
3. 紀元前 715 年、父王アハズが死去 (36 歳) (Ⅱ列 16:20、Ⅱ歴 28:27)
4. 紀元前 714 年、ヒゼキヤが自分の治世開始のとき・・・Ⅱ歴 29:3~30:27
- (1) 治世第 1 年第 1 の月に、主の宮の戸を開き、これを修理した。さらに、祭司とレビ人を集め、自分自身を聖別し、主の宮を聖別するよう命じ、実行させた。
    - ① 父アハズが「主の宮の戸を閉じた」(Ⅱ歴 28:24)
    - ② 「彼らは (神殿の) 玄関の戸を閉じ、ともしびの火を消し、聖所でイスラエルの神に香をたかず、・・・」(Ⅱ歴 29:7)
  - (2) 全イスラエルとユダに使いを遣わし、エフライム族とマナセ族に手紙を書いて、エルサレムに来て、主に過越のいけにえをささげるよう呼びかけた。身を聖別した祭司たちが十分な数に達していなかったため、第二の月に行くこととした。
  - (3) エルサレムに大きな喜びがあった。ソロモンの時代からこのかた、こうしたことはエルサレムになかった。
5. 紀元前 701 年、治世第 14 年 (38 歳) に、存亡の危機を迎える・・・Ⅱ列 18:13
- (1) 13 節 「アッシリヤの王セナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々を攻めて、

これを取った」

6. このときのアッシリヤ軍は、先遣隊と本隊の二手に分かれてエルサレムに攻めて来た。
  - (1) 先遣隊は、カルメル山の東からイズレエル平野へ入り、そこから南下して、サマリアを抜け、エルサレムの北の町、ノブまで来た。先遣隊がカルメル山まで来た時点ですでに、ヨルダン川東側のアモン、モアブ、エドムといった諸国は、ユダを支持することをやめ、アッシリヤに服従した。アッシリヤ軍がノブまで来ることは、イザヤが預言していた（イザヤ 10:28~32）。
  - (2) 本隊は、カルメル山から地中海沿いに南下して、現在のテル・アヴィブの地域に進軍した。ベテ・ダゴン、ヨッパ、アツオル、アフエクといった町々を制圧した。
  - (3) ヒゼキヤの要請を受けてエジプトは援軍を送り、ガザ、アッシュケロンを通って、エルテケまで北上してきて、アッシリヤの本隊と戦ったが、エジプト軍は敗れて撤退した。
  - (4) アッシリヤの本隊は、ティムナ、エクロンを制圧して、次にラキシシュを攻撃するために、王の本営をラキシシュに置いた。
7. II列 18:14~17 ヒゼキヤはラキシシュに本営を置いたアッシリヤの王のもとに使者を送り、講和を求めた。
  - (1) アッシリヤの王は莫大な金銀を要求。ヒゼキヤがあるだけの金銀を差し出したが、要求された量には足らなかった。
  - (2) アッシリヤの王は配下の将軍たちに大軍をつけてエルサレムに向かわせた。ここに記された将軍たちの名は、個人名ではなく、アッシリヤ軍の中での階級を示す称号である。
    - ① タルトン（アッシリヤ軍の最高級将校の呼称、「最高司令官」の意味）
    - ② ラブ・シャケ（アッシリヤの高官の称号、ラブはアッカド語で「首長」・シャケーは「飲ませる」）
    - ③ ラブ・サリス（同じく軍の称号、サリスはアッカド語で「かしら」）
  - (3) 17節 タルトンたちが率いるアッシリヤ軍（以下、「別動隊」）は、「布さらしの野への大路にある上の池の水道のそば」に来た。これはエルサレム城外の東側である。籠城側にも攻撃側にも必要な水源を確保する上で、重要な場所であった。別動隊はいち早く、ここを占拠してユダを威嚇しようとした。この動きは、籠城側も予測していて水源はふさいでいた（II歴 32:2~8）。
  - (4) エルサレムの北側には、すでにアッシリヤの先遣隊がノブまで来ている。エルサレムは北と東と主要な交通路を遮断され、包囲された。
8. II列 18:18~36 アッシリヤ別動隊の高官のうち、ラブ・シャケはヘブル語を話し、ユダの国情に通じていた。彼はヒゼキヤ王がより頼んでいる神を侮辱した。
9. II列 19:1~7 イザヤの預言「あなたが聞いたあのことば、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒瀆したあのことばを恐れるな。今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す」（II列 19:6~7）
10. II列 19:8 アッシリヤ王の本隊は、ラキシシュから移動して、リブナを攻撃していた。ラブ・シャケはエルサレムを包囲する別動隊から離れて王の本隊に合流した。

11. Ⅱ列 19:9~13 このとき、アッシリヤ王のもとに知らせが入った。クシュ（エチオピア）の軍が攻めてくるとの知らせであった。アッシリヤ王はクシュの横やりが入る前に、ヒゼキヤを脅して降伏を急がせようとした。王は再び使者たちをヒゼキヤに遣わし、ヒゼキヤがより頼む神を侮辱する手紙を送った。
12. Ⅱ列 19:14~34 ヒゼキヤはその手紙を読み、主の宮に上って行って、それを主の前で広げた。ヒゼキヤは祈り、預言者イザヤは人をやって預言を伝えた。
13. Ⅱ列 19:35 その夜、**主の使い**が出て行って、アッシリヤの陣営で、18万5千人を打ち殺した。
- Ⅱ歴 32:21 主は**ひとりの御使い**を遣わし、アッシリヤの王の陣営にいたすべての勇士、隊長、首長を全滅させた。そこで彼は恥じて国へ帰り、彼の神の宮に入ったが、自分の身から出た子どもたちが、その所で、彼を剣にかけて殺した。
14. Ⅱ列 19:36~37 アッシリヤ王セナケリブは立ち去り、ニネベへ帰った。彼がその神ニスロクの宮で拝んでいたとき、彼の子のうちの二人が剣で彼を打ち殺し、アララテの地へ逃げた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。
- セナケリブの在位期間はBC704~681。アッシリヤ側の戦記は「エルサレムに籠城したヒゼキヤを籠の中の鳥のように閉じ込めた」
15. Ⅱ列 20:1~11 そのころ（紀元前 701 年）、ヒゼキヤは病気になって死にかかった。預言者イザヤを通して「あなたの寿命にもう 15 年を加える」。紀元前 701 年から 15 年後は紀元前 686 年、預言のとおりヒゼキヤは 15 年後、53 歳で死去した。
- (1) 病気になってから死ぬまで 15 年である。彼の治世は 29 年、アッシリヤ軍の侵攻があったのは第 14 年、よって、病気になったのは、まさに、アッシリヤ軍の包囲を受け、主に堅くすがり、祈りによって（Ⅱ列 19:14~19）救われた年、ヒゼキヤ 38 歳であった。
  - (2) なぜ、ヒゼキヤは病気になったのか？ おそらくヒゼキヤの高ぶりである（参考 Ⅱ歴 32:22~24）。
  - (3) この病気が癒されたのちも、ヒゼキヤは主の訓練を受ける（次の 16. へ）
16. Ⅱ列 20:12~21 そのころ、バビロンの王が使者を遣わし、病気から癒えたヒゼキヤに贈り物をした。→ イザヤによる預言「アッシリヤではなく、このバビロンから攻撃を受ける」
- (1) ヒゼキヤの思い 「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は、平和で安全ではなかろうか、と思ったからである。（19 節）
  - (2) 彼がバビロンの使者たちに都中を見せびらかしたのは、やはり彼のうちに自慢する気持ちがあったからである。Ⅱ歴 32:31 「神は彼を試みて、その心にあることをことごとく知るために彼を捨て置かれた」。
  - (3) Ⅱ歴 32:25~26 このあと、彼は、病気からいやしてくださった主の恵みにしたがって主に報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。指導者の罪は、国民にも及ぶ。御怒りが、彼の上に、そして国民の上を下ろうとした。あらためてヒゼキヤと民が、その心の高ぶりを捨ててへりくだったので、主の怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった。

## アハズ、ヒゼキヤの在位時期と アッシリヤ王との関係図



Ⅱ列16章5節、Ⅱ歴28章、イザヤ7章の出来事は、アッシリヤ王ティグラテ・ピレセルの時代に起きた。  
 アラムを破ったのは、アッシリヤ王ティグラテ・ピレセル。  
 アッシリヤ王ティグラテ・ピレセルは、紀元前727年に没。  
 よって、アハズが20歳から24歳までの間に起きた出来事である。

Ⅱ列18:9～12、北イスラエルを滅ぼしたのはアッシリヤ王シャルマヌエセル。紀元前723年。  
 このとき、アハズは28歳。

イザヤの預言「イザヤの子がまだ善悪をわきまえない子どものうちに、アッシリヤが2つの国を破る」(イザヤ7:15～17)  
 そのとおりに、アハズが28歳のときまでに成就した。